

T. S. Eliot の FOUR QUARTETS について

府 坡 才 昌

Images の積み重ねとか、詩の対象、事件、situation の連結とかによる詩の構成方法が chronological sequence にもとづかないことが T. S. Eliot の有機的な詩集 *Four Quartets* の重要な一特徴である。その代り、一つの詩の対象である場面を互いに対立する思考や、意味的に異なり、表面的に連関のない言葉と言葉とが、互いに密接な関係をもちつつ、詩の構造に大きな影響を及ぼしている。そのみならず、否定する sentence と肯定する sentence とから形成することによって、また同一 images の詩の各所における反覆や空間的にも時間の系列からも相へだたっているさまざまな詩的・視覚的映像の合一によりつくられる意味の形成ということと、時間的持続の面から見た現実の歴史的な把握と認識ということが、この詩篇の方法として行われている。このような現実のとらえ方は人間存在に対する宗教的な見解から生れるものだが、また一面それは現実を一瞬間超光学的な眼底にとらえる空間的理解の方法を、その可能性の最大限にまで試みた究極に現れる認識手段が、すなわち歴史的・時間による捕捉ということになるのであろう。しかしながら注意を要するのは、時間的認識と空間的理解とは、おのおの單獨では相対的である。両者の方法によって真理に到達することが可能となるのは、それらの根底に、その基礎となる知的直観が大きな作用をなし、それによって導びかれているから両者とも正しい方向をとることが出来るのである。現実の社会的環境に対してわれわれの個人的意識が歴史における時間を正確に捉えるためにはリズムの使用は有益なのである。それ故 *Four Quartets* においては音楽的に対照的な効果をあげるシンメトリカルな旋律のはなやかな動きと性質が今までにない重要な役割を演ずる。エリオットの言葉をまづまでもなく、表現に達する前に詩はリズムとして予感されるということは、詩における荒々しい原始的な情緒が最高度に美的な品華を遂げるためにはリズムは必須であり、したがってそれは詩の普遍的な統一原理であるということの意味する。それとともにリズムは時間の眞の性質をわれわれに理解させる唯一の手段である。われわれ人間の生の情緒や突発的な、ならされていない感情や感覚的に、われわれの官能にうったえる音楽がわれわれの全存在をゆすぶり、その内部に満ち、その運動を支配するのは、その中に含まれる

リズムの作用があずかって力があると考えられる。したがってこの詩における方法としての詩的な映像や神話的な象徴の反覆とリズムに対する意識と心理の内部における時間と非時間との関係のもつ重要性は無関係ではない。最近新たに *The Cocktail Party* 等一連の詩劇において宗教的価値と意味の重要性を社会的に、広く伝達することに関心を向け始めたエリオットの *Four Quartets* における目的は、ある限りの様々な思考の方法と image 形成の種類と質的変化により唯一の實在——the truth which interprets for us the religious experience of our whole life の周辺に迫まらんとすることである。このような形而上学的、神学的主題によってこの全詩がきづかれていることがまず第一に知らなければならない。われわれの文学的常識と基礎的教養から見て芸術作品としての必須条件である美的価値と情緒的調和が発見されないではないかという観察はここから生ずるのである。が、しかし博学なエリオットが東洋から学んだインドの典籍 Upanishads や Veda の世界が、キリスト教的、西欧的色彩にぬりかえられて現れる。それ故この *Four Quartets* のもつ最も重要で、一見難解な性格は、これは詩であって、しかも詩ではないということであると思われる。この矛盾が全篇を色どっている。もし詩が深い意味をおわされた言葉や表現のありとあらゆる組合せと連結や、また分離と圧縮等により出来るかぎり強烈な意味を効果的に表現することを使命とするとすれば、それ故、一步越えるともう言葉では表現できないのに、なお意味をもち続けているというような意識の境界地帯の問題に入ってくる。このことは詩の扱う領域から遊離し、そぐわない感じを与えることは明らかであろう。このような *Four Quartets* において用いたエリオットの詩の方法は、言葉が果す意味の限界作用を極度に嫌った結果、生れた方法である。社会的伝達の道具である言葉がもつ不純と曖昧性を言葉から追放しようとする意図は、エリオットのリゴリズムからすれば、必然的で、避けがたいものと考えられる。しかし、エリオットが *Four Quartets* において英詩の伝統を重んじながら、伝統を破壊しようとする矛盾のよって来たる所はもっと深い所にある。宗教を詩における価値基準として詩の中に導入した結果が詩そのものを否定し、詩としての美的純粋性と客観性を失わしめることになったとすれば、問題となるのは詩人の才能自体よりも、宗教と結びつかなければ詩とつながりをもち、詩を考え創ることを出来なくなさしめた現実的状況の切迫と圧力であろう。不安と混乱の切迫した現代の危機から詩人が逃避することを拒否するとすれば、詩人のとる方向が必然的に局限されるかどうかは今後に残された問題であるが、現代詩人が何時かは行かなければならない

未知の領域の開拓を、——たとえ、実験的で必ずしも完全とはいいがたいにしる、——卒先したことはそれ自体が、その作品の出来不出来はともあれ、エリオットの現代詩に対する一つの賞讃すべき偉大な寄与だといわねばならぬであろう。いうまでもないことであるが、カトリック教会の信者としての信仰がこの宗教詩の性格をあらゆる面において決定する要素となっている。宗教的 symbols や images の表出は勿論であり、感覚的な lyric にせよ、瞑想を述べる散文的な表現にせよ、sermon 調の会話文にせよ、すべてがそうである。この作の難解について一言すれば、この作品は鑑賞の対象と見なされる以上の性質をそなえている。この作に接するには Bible に向う時のように読者の側における心的態度の質的革命が要求されているが、しかし、感じないものを感じ、ないものを想像することを強いるのではなく、各読者個人の周囲の現実に対する誠実と忍耐強い努力が生む判断を期待するのみであり、詩の中の image を自己の経験の中に生きる現実として認識しうるまでに、内的世界——認識の層の拡大と明確化に自己が慣れることである。対立する矛盾の統一を最高の主題としたエリオットが行った思索にうかがえる未熟と未完成は、現代人の生存の場における行為の矛盾を投影したものであり、特徴的なのは、詩人の潔癖さである。その場合、D. H. Lawrence が主観的であるのと違った意味で彼も主観的といえよう。ローレンスの主題は生であり、エリオットの主題が死でありながら、両者は違った道程をとって同一の目標を目指したように。——

× × × × ×

Four Quartets の四つの詩の題名は皆地名から取って来たものだ。最初の詩 'Burnt Norton' は England の Gloucestershire の manor の地名であり、その近くに Eliot は住んだことがあった。他の三つの詩の題名は Eliot により近い親しい関係のある地名である。'East Coker' とはエリオットの先祖が17世紀の中頃、New England に移民する前に住んでいた Somersetshire の地名である。'The Dry Salvages' とは北米 Massachusetts 州の Cape Ann の沖あいの一群の岩の名称であり、それはエリオットが少年時代深い印象を受けた海岸の景観の一部を示すものである。'Little Gidding' とは Huntingdonshire のある村の名称で、そこに Nicholas Ferrar とその家族が俗世を離れて信仰の生活に入り、神に帰依する目的で建設した国教派団体の寺院がある。

"Burnt Notten"

"Burnt Norton" の初めの数行は過去におこったことや、現在おこりつつある事柄は過ぎ去ったものであり、未来とは関係がなく消滅したものであるとい

う楽観的な時の見方とは真向うから対立する古典的な時の見解を表明している。すなわち過去はすぎさったもの、死んだものではなく、未来におこることは、何よりも確かなことであり、過去に含まれているのである。過去のことは死んだものではなく、未来のことは架空の空想的なことでない故に過去も未来も現在の時間に属し、含まれているのである。All time is unredeemable という意味はこのことを指すに外ならない。過去を見るとは、未来を見ることであり、未来を見るためには現在を見なければならない。

What might have been and what has been
Point to one end, which is always present.

この passage の意味する所は、「あったかもしれない」という可能性は、單なる可能性に止まるものではなく、真にあったものと同様の態度で現在におけるわれわれの責任を問いたし、その目標を指し示すのである。ここにおいては時は過去から現在・未来へと長くのびる連続として見られているのではなく、過去でもあり、現在でもあり、未来でもあるという一点として弁証法的にとらえられている。次の footfalls の image は言葉が耳に聞える程はつきりしたものでありながら、われわれは見知らぬものであり意味の判然としない何物かがあることを暗示する。“Burnt Norton” の first movement の背景は暖かな日光の輝く秋の薔薇園である。

Quick, said the bird, find them, find them,

つぐみがわれわれを招待するこは平和と静寂にみちている。すなわち our first world と呼ばれる幸福を象徴する。薔薇は美の象徴であるとともに、若く美しい少女を意味するものでもあり、その底には生の誕生えつながらの性の意味も含まれている。新たに水の満たされた池も、そこに起き上る漣も同様に生命力の exuberance と魂の平和とを symbolize する。

第二 movement の主題は the still point であろう。ここにエリオットの雄弁と論証への意志が現れるとともに、リズムの高調と tone の激しさがうかがわれる。ここでエリオットの絶対時間への——永遠への執拗な探求と模索が、言葉の表現しうる意味限界をこえるギリギリの立場で行われる。The release from action and suffering, release from the inner / And the outer compulsion, yet surrounded By a grace of sense, a white light still and moving, “inner” の

次の小休止は次の二行の強い強調を含めた言明を準備するものであり、ここで tone が一時抑えられることにより、より高い音楽的效果が続く行において打ち出されることになる。

a white light still and moving

これはエリオットの望む神の栄光の超自然的 vision であろう。Yet the enchainment of past and future 以下四行は伝統による個人の統制の期待による精神の浄化と鼓舞が肉体の脆弱さの支えとなり、illusion と絶望とから救うということの意味するものと思われる。次の Time past and time future によって tone は supernatural で sublime な段階から real な substantial な段階に移る。第二 movement の終幕には最初の image が甦えつつ来るが、ここでは時の外の永遠を知り、永遠と合一する瞬間も結局、時間の枠の中で存在が可能なことをいう。Only through time time is conquered.

第三 movement は後の二つの Quartets 四重奏のこの部分におけると同様に、現代世界になぞらえられたロンドンの地下鉄の内部が背景として浮び上る。現代社会に生きる人々の何らの目的をも持たない、瞬間の気晴しや一時の快楽にその日その日を送る生活をロンドンの地下鉄内の薄闇の世界に象徴したものであろう。明るい日射しの中の世界は神の光明のゆきわたった世界を意味し、暗黒は魂の安らぎと休息を与え、神への結びつきを可能にする媒介体であるのに対して、twilight は思考の中断した、感覚の麻痺した、時間の流れのなすまみにさせる空虚な存在の泥だくした意識を象徴する。

Distracted from distraction by distraction

という言葉の play は、この context の中に置いて、現代人の意識の構造を側面から捕捉するのに成功する。再出する Time before and time after という image は past and present という意味であると同時に瞬間を追う意識の焦りと困惑を示すためのものではないか。第三 movement の後半はキリスト教的平和と stillness の世界への一つの道が暗黒への降下——五感の遮断・慾望の排除として示される。地上を否定した、精神の望む神の天国の発見のためには人間の生が普遍であるという生の意識が棄てられて——日々の活動の基礎である知覚能力の根源さえも切断されなければならない。聖書にもあるように、われわれの眼がわれわれをつまづかせるなら、両眼にてゲヘナに入るより片眼にて天

国に行くのがよいのである。人間の意義ある行動が社会的行為としての枠から出ることが出来ないのもであるとすれば、われわれにとって必要なのは——人間として要請されるのは——個人的な内面的魂の恍惚たる至福状態ではなく、むしろそれを犠牲にした、主体的意志の上に立つ演戯力による外界における統一ある行動であり、落ち着いた客観的に承認されうる秩序づけられた妥当性である。逆説的にいえば、われわれが人間としての主体性を持つかぎり、内面的感情の動揺・混乱を抑圧し、抹殺し、犠牲にして外界の秩序を保つのに寄与しなければならないのである。それが人間の苦悩である。エリオットが孤独の暗黒世界への下降という場合も、それは決して社会的世界を自己の生存の場としては放棄して、自己の内部にのみ住み、そこに *private* な快樂と夢想の無私の瞬間を楽しむ狂人の意識状態に似たようなものを指すのではなく、それはあくまで沸騰する感情のつぼとして、不安と焦燥以外の何ものでもない動揺し、逆上し、混乱する人間的なもろもろの慾望を耐え忍ぶことを意味し、暗黒とは感情の暗黒に外ならない。一言にしていえば絶望である。それは *moment of illumination* ではなく、自己の意志と理性を押し流さんとする圧倒的な感情の激流に絶対的な意識でもってそれにさおされて、自己の自由を確立せんとする努力のそれである。

Only by the form, the pattern,
Can words or music reach
The stillness, as a Chinese jar still
Moves perpetually in its stillness.

人間の生を含めた宇宙におけるすべての現象界の特質は絶えざる運動の様相であろう。生存界の実相が生成・運動・振動であるが故に常に常に虚無の底知れぬ深みにかかっており、死滅の運命をその背後に感じている。このように現象界の法則のもと変転常なき生を時間の支配から解放し、永遠の規範に合一せしめる手段はそれに形——*pattern*——を与え形象化することの外はない。運動の状態を脱して始めて時間の外に生きうるのである。この “Burnt Norton” の背景が *seventeenth century* の *manor* という特定の場所ではなく、一般的な *conventional* な場所であり、*garden* の一例に過ぎず、その目的は各個人の意識の内部 (*private world*) を呈示することにあると一批評家はいうが (Helen Gardner) とういふふうに受けとって間違ではないだろう。それが神に対する誠実な自己告白であり、信仰の社会的伝達であり、思考の高次における永遠の实在の把握であ

ると同時に、言語表現における新たな可能性を音楽性のリズムとストラクチャの使用によって探求することであるとしても、いずれもエリオットの意図にかなっていないとはいえないのである。それ故詩人の statements の重要さや significance は対立的矛盾や speech のリズムの contrast や poetic form の variety によって伝達される。

“East Coker”

first movement の冒頭の line は Heraclitus の “the beginning and the end are common” または Mary Stuart の chair of state の motto “In my end is my beginning” から influence されたものであると考えられている。この言葉は first movement の中に二度繰り返えされて後に続く paragraph の台辞の役目を果しているが、その台辞から本文への発展の仕方、両者の関係は必ずしも明瞭ではない。In my beginning is my end はその影響されたと思われる出典のいずれよりも意味が強烈で、内容の点から相通する所が少いといえる。この言葉は少くとも二つの意味——歴史的と宗教的との——を含んでいると考えられる。宗教的には私の始めには——私の誕生にはすでに私の終り——死が暗示され予告されている。土から生れたものは土に帰らなければならないという意味で determinism の色彩が濃いが、また同時に、肉体の死滅は魂の永遠の復活を可能にするというキリスト教的見解が二重否定的に含まれている。first paragraph は歴史の生成・発展・衰退・死滅の回帰的思想を示したものと解しても、それはニーチェの永劫回帰論の如き哲学的思索の結果の理論体系ではなく、素直な事実の感覚、宗教的な自然に対する敬虔な信頼と崇拜から生れた何ものである。歴史の観念に貫ぬかれた感動的な image の後現れる夏の真夜中、野原に bonfire をかこび結合を祝して dance する男女の影は、神に祝福された婚姻のカトリック的観念を示す。

“The Dry Salvages”

New England coast, Cape Ann の押しあいの一群の岩の名である “The Dry Salvages” は詩人の少年時代の記憶の重大な一角を形成するが、ここに展開される壮大で力強いリズムと image の混和した交響楽は宇宙的次元に拡大する歴史の中に非実在化するわれわれの存在に、昔ながらの原始人の魂を呼び戻し、われわれの遠い意識の内奥に歴史を超えた神と接触する永遠の存在を可能にする。褐色の神なる河の image は詩人の故郷に流れていた偉大な河 Mississippi に対応するが、文明の使用に卑俗化し、柔弱化した河も常にその季節と怒りを保存し、時至る時は原始の映像を現出し人々に神の怒りを示し、信仰の行爲を

迫る。瞬間瞬間の現在の人間の生の経験を行きて帰らぬ過去のものとする時の力に比較される河の流れは春から冬へとすぎる季節の流れと同様に誕生から死への人間の生の流れに類似を見出すものとすることも出来よう。過去の *destroyer* であり、原始の *reminder* である生なる河は、またわれわれの内部にも流れると詩人はいう。詩人に必要な歴史的意識とは互いに異なる空間と時間内にあって過ぎ行くものを固定した同一の平面においてとらえ、瞬間における固定した生の現実相を過ぎ去るもの——単一次元のものをそれぞれに質を異にする多次元に属する流動的・一時的なものとしてとらえることを必要条件とする。したがって時をへだてた一年の四季も瞬間、同一平面上の出来事として意識され、一望の下にとらえられるのである。このような矛盾の統一は神の暗黒につながる個人の意識内において始めて可能なのである。Saint ならいざ知らず、信仰から遠ざかりつつある現代人が神の栄光と信仰の必然を見うるためには *acceptance of ignorance* を土台にしなければならないのである。

I have said before that the past experience revived in the meaning is not the experience of one life only / But of many generations とは “East Coker” の第五 movement の後半にある次の passages を指すものであろう。

And not the lifetime of one man only
But of old stones that cannot be deciphered.

すなわち、ここでは個人の生死が他のすべての人間の生死との連帯において捉えられ、個人の過去を現在に再現して、その意味に接近することは他の人間の過去の経験の意味をも理解することであり、逆にまた社会の活動のうち自己の役割を行うことにより始めて自己の個人的経験の眞の意味を他との結合関係において知ることが出来る。something that is quite ineffable とは死そのものの観念ではないか。死に対する人間の忪いがたき恐怖こそ人間の運命に常まつわりつく the primitive terror であろう。死はわれわれが生の眞ただ中にいると思っている時でもふいにすすり泣きを始めるものであり、死への存在が人間の本質的規定であると詩人はいう。

On a halcyon day it is merely a monument,
In navigable weather it is always a seamount
To lay a course by: but in the sombre season

Or the sudden fury, is what it always was.

穏かな日には川はただ遺跡であり
航行できる天候には常に航路に横たわる目標である
しかし薄暗い季節か 突然の怒りには
それは常にその本来の姿になるのだ。

この movement の始めに現れた不気力さを含んだ否定的懐疑的 tone は一切払拭され、内部的思考の、どちらかという冗長で散文的説明が消滅して、明らかな image によって実在の極限概念をわれわれの前に突きつけて、われわれにおけるその有無を問いたただすのである。

最後の "Little Gidding" の中で、Terza Rima により堂々と詩人が述べ立てた事柄の基礎を形成するエリオットの詩的思考の中核は何であろうか。他の詩のこの section における Andrews の形而上学的 reflection はここには現れない。それは中世ダンテが見た世界の vision を、現象の姿を、現代的状況において再現することであった。現代世界を Inferno と Purgatorio としてとらえ Dante の視角から人間たちをのぞむことがこの場のエリオットの詩的思考の pattern であると考えられる。「現在とは過去によって導びかれると同時に過去は現在によって変えることが出来る。」という歴史的意識は伝統論以来 Eliot の一貫した主張であった。Eliot は最初から個性の脱却・自己滅却をとく根本からの古典的伝統主義者としてわれわれの前に現れた。その極端なまでに見える自己の外に離れて立つ外的権威への屈従の強調は、人間の内的独創性に最高の価値を置き、それを、すべてを判断し、断定する至上の基準として疑わず、人間性を可能性に満ちあふれる泉とする近代文芸精神に親しいわれわれには保守的に見える程目新しい思想と映った。しかし、実はエリオットの目指した理想が決して中世への復帰ではなく、近代精神の正しい発展のあり方を結果として追求し、詩においては解体した人間性の分裂を回復することをその目的としていたことをわれわれが知る時、われわれは彼こそ眞の個性主義者であることを確かめ得たのである。このようにして伝統の確立をとき、そして実はその反対側で個性的才能の眞の価値と偉大さを認め、それに眞に正しい位置と意義を与えようとした彼は、いうまでもなく、われわれの地上の死とともに個人の創造精神も文化も滅びざるを得ない事実を目醒めたのである。